

研究ノート

スペイン語複文の新たな分類の試み
—二極文再定義を通じて—仲井 邦佳ⁱ

スペイン語文法では伝統的にその複文構造を「等位文」/「従属文」の二分法で分類し、分析してきた。しかし、ギジェルモ・ロホ (Guillermo. Rojo) の *Cláusulas y oraciones* (1978) の発表を機に第3の「二極文」(Bipolar) というカテゴリーを立てる潮流が生じた。本稿では二極文の概念を, Gutiérrez, Fukushima, Jiménez らの説も参考にしながら批判的に検証し、実際にはその範囲はずっと狭く定義すべきであるとす。一方で、「比較文」(Comparativa) と「結果文」(Consecutiva) を「相関文」(Correlativa) として再定義し、これらこそが二極文であることを主張する。両者の統語構造には共通する特徴が多く、実は同一の潜在的なプロトタイプ構造から生じる2つのバリエーションである。通常、比較文は「対称構造」(Estructura Simétrica) として現れ、結果文は「非対称構造」(Estructura Asimétrica) として現れる。最終的には筆者独自の新たな三分法の複文分類とその下位分類を提案する。それは、「等位文」"Coordinada" / 「二極文」"Bipolar" / 「従属文」"Subordinada" であるが、筆者独自の用語では「結合文」"Conectiva" / 「相関文」"Correlativa" / 「填込文」"Incrustada" となる。

キーワード：複文, 等位文, 従属文, 二極文, 相関文, 比較文, 結果文

はじめに

スペイン語文法研究の長い歴史の中で複文・重文の統語構造に関しては、十分な研究がなされてきたとは言いがたい。言うまでもなく、伝統的には「等位文」/「従属文」という二分法が維持されてきた。しかし、ギジェルモ・ロホ (Guillermo Rojo) の *Cláusulas y oraciones* (1978) の出版を契機としてこれらの複文の構造とその分類（そしてその下位分類）について議論が盛んになった。

本論の目的はこれまでの複文分類について考察し、さらに筆者独自の新たな三分法の分類を提案するこ

とにある。そのためには、ロホが打ち立てたとも言える「二極文」(bipolar) の概念を修正し「相関文」(Correlativa) というカテゴリーを提唱する。

なお、本稿は現在執筆中の論文の骨子を研究ノートとしてまとめたものである。用語に関しては、スペイン語の原語の日本語訳がなかったり定着していないものも多く、仮に訳出したものもあることをお断りしておく。また、重要な概念である「文」(oración), 「節」(cláusula) 等の使用は必ずしも厳密に使い分けたものになっていない。そもそもこれらの概念を定義するには多くの紙幅が必要であるし、本稿の直接のテーマではないので別の機会に論じるべきと考えている。

i 立命館大学産業社会学部教授

1. 「等位文」 / 「従属文」：伝統的二分法

最初にスペイン言語アカデミーの *Esbozo* (1973) を見てみよう (表は筆者がまとめたものである)。

(1) 表1 : *Esbozo* (1973)

Esbozo においては伝統的な分類法が取られている。ただし、細部に関しては変更があり、例えば「目的節」(Final) をアカデミーは以前、主節動詞の間接目的語の機能を持つ名詞節と見ていたが、本書では独立した「目的節」とみなしている (p. 547)。そして、現在でもアカデミーは「等位文」 / 「従属文」という伝統的二分法を基本的に維持している²⁾。

最後に注意を喚起しておきたいことは、伝統的二分法においては、等位文でないものは全て従属文に分類されるという傾向にある。つまり、従属文は等

位文よりも非同質的な性格があることである。

2. 第3の категория 「二極文」(bipolar)

さて、「等位文」 / 「従属文」という二分法の長い伝統の後、遂に第3の categoria が提唱されることになる。スペイン語文法に「二極文」(bipolar) という概念を「二極性」(bipolaridad) と共に導入したのは前述のように G. ロホであると言える。ただし、その考えは彼自身が考案したのではなく、ガルシア・ベリオ (García Berrio) が既に言及していたものである。ベリオは「従属文」の中に「相互依存」関係 (interdependencia) を想定したが、ロホはさらに一歩この考えを発展させて、従属文とは別の「二極文」(bipolar) を立て、その内部での2文関係を「相互依存」とした。ロホの分類を表にして見てみよう。

表1 : *Esbozo* (1973)

文のタイプ	下位分類		接続詞例	
並置文 (Yuxtapuestas)			—	
等位文 Coordinadas	連結文 Copulativas		<i>y</i>	
	配分文 Distributivas		<i>ora...ora...</i>	
	分離文 Disyuntivas		<i>o</i>	
	逆接文 Adversativas		<i>pero</i>	
従属文 Subordinadas	名詞文 ¹⁾ Sustantivas		<i>que</i>	
	形容詞文 Adjetivas		<i>que</i>	
	状況補語文 Circunstanciales	I	場所文 De lugar	<i>donde</i>
			時況文 De tiempo	<i>cuando</i>
			様態文 De modo	<i>como</i>
			比較文 Comparativas	<i>más...que</i>
		II	目的文 Finales	<i>para que</i>
			原因文 Causales	<i>porque</i>
			結果文 Consecutivas	<i>luego, tanto...que</i>
			条件文 Condicionales	<i>si</i>
	譲歩文 Concesivas	<i>aunque</i>		

表 2 : Rojo (1978)

文のタイプ	下位区分	接続詞
単節文 ³⁾ Monoclausales	名詞文 Sustantivas	<i>que</i>
	形容詞文 Adjetivas	
	状況副詞文 Adv. Circunstanciales	<i>cuando</i> <i>como</i>
多節文 Policlausales	連結文 Copulativas	<i>y</i>
	配分文 Distributivas ⁴⁾	
	分離文 Disyuntivas	<i>o</i>
二極文 Bipolares	原因文 Causales	<i>porque</i>
	譲歩文 Concesivas	<i>aunque</i>
	結果文 Consecutivas ⁵⁾	
	条件文 Condicionales	<i>si</i>
	逆接文 Adversativas	<i>pero</i>

ロホは「二極文」というカテゴリーを立て、「非本質的副詞節」(Adverbial Impropia)を従来の従属文からこちらに移したわけである。そして同時に、等位文の1種と考えられていた「逆接文」(Adversativa)をもこの新たに創設された二極文に入れ込んだ。

3. 二極文の変遷 :

Rojo (1978) から Jiménez (2011)

Clausulas y oraciones (1987) が出版されるや多くの研究者からは総じて好意的に受け入れられた。しかし、その理論の核心的な点に関しても批判や反対意見がなかったわけではない。

3.1. 逆接文のステータス

まずは逆接文を二極文に含めたことに対する批判から見てみよう (Cfr. Gutiérrez, 1977-78; Fukushima, 1982; etc.)。最初の批判はロホが意味的なことと統語的なことを混同していることにあった。確かに (3) は意味において (4) と類似性がある。

(3) El gobierno ha devaluado las monedas, *pero* las importaciones no han disminuido.

(4) *Aunque* el gobierno ha devaluado las monedas, las importaciones no han disminuido.

そこでロホはそれらの統語構造もまた同質であると見たわけであるが、逆接文の譲歩文との密接な関係は必ずしも両者が同じ構造を持つことを正当化しない、つまり同等なのは意味的であって統語的ではないからである。もし (3) と (4) が近似であるとするならば、(3) と (5) もまた近似であるということになる⁶⁾。

(3) El gobierno ha devaluado las monedas, *pero* las importaciones no han disminuido.

(5) El gobierno ha devaluado las monedas, *y* las importaciones no han disminuido.

(3) と (5) は意味的に類似性があると言えるだけでなく、統語構造においては (3) と (4) 以上に近い関係にあると言わざるを得ない。したがって、逆接文を等位文から分離して、二極文に入れるという考え方は妥当ではない。

ロホが逆接文を二極文に入れた別の理由に、逆接文が2つの要素だけを連結するのに対して等位文は以下の (6) のように2つ以上の要素 (理論的には無数) を連結することができるということがある。

(6) Entró en la habitación, recordó lo que tenía que hacer, hizo una llamada y se despidió ...

導入できる要素の数の違い (逆接文は2つだけだが、等位文は2つ以上) はもちろん正しい。しかし、筆者はこの基準を等位文を定義する基準としては用いない。したがって、やはり逆接文を二極文の一種であるとする考えには組しないことになる。

結局は、逆接文は以前にあった場所、つまり等位文に戻して分類すべきであろう。

3. 2. 非本質的副詞文のステータス

逆接文のステータスについて論じる前に非本質的副詞文について扱うべきであった。なぜなら、前者は後者が二極文に分類されたがゆえにこちらもまた二極文の一種であるという判断がされたからである。非本質的副詞文とは、原因文 (Causal)、譲歩文 (Concesiva)、条件文 (Condicional) などのことで、本質的副詞文 (状況補語文) とは区別される。ロホは本質的副詞文は従来通り従属文のままとした一方、非本質的副詞文を新しく立てた第3の二極文としたわけである。しかし、この説に対してもすぐに反論が見られた。例えば、グティエレスは二極文のカテゴリーを否定し、それらは従属節であると主張する (Gutiérrez, 1997: pp. 30-33)。以下にグティエレスの示したゼロ記号換入の例を挙げる。

(7a) El poeta dice que Juan ha suspendido porque no había estudiado.

(7b) El poeta dice que Juan ha suspendido.

(7c) *El poeta dice que porque no había estudiado.

上に見られるように *porque no había estudiado* は省略することができる (7b) 一方、*Juan ha suspendido* はできない (7c)。したがって、両者の間に相互依存関係を認めることはできない。

3. 3. 二極文としての比較文 (Comparativa) と結果文 (Consecutiva)

既に見たように Rojo (1978) においては「比較文」(Comparativa) と「結果文」(Consecutiva) についてほとんど触れられていない。しかし、一方で明確にこれらを二極文としている研究者もいる。例えば、アントニオ・ナルボナ (Antonio Narbona) はこれら構文をはっきりと二極文に含めている。

[...] la correlación formal de términos (*tan...como; tanto...que; etc.*) es clara prueba de interdependencia sintáctica: de hecho, ninguno de sus

miembros puede concebirse como unidad con articulación sintáctica independiente (Narbona, 1989: p. 122).

3. 4. Jiménez (2011) における三分法

本論のテーマである複文の構造とその分類をもっと深く研究している研究者の一人は、ロホと同じサンティアゴ・デ・コンポステラ大学のトマス・ヒメネス (Tomás Jiménez) であろう。ヒメネスはロホと共著の1989年の研究では非本質的副詞文 (条件文、譲歩文、結果文、比較文) を二極文としているが (Rojo y Jiménez, 1989: p. 138), 後に (Jiménez, 2011) はこれらの一部 (原因文、譲歩文、条件文) を二極文から分離し、従属文に分類した。また、Jiménez (2012) では以下のように述べている。

En este sentido, la generalización de *Cláusulas* es excesiva, probablemente porque su fin era resolver el problema analítico de las llamadas tradicionalmente “subordinadas adverbiales impropias” (2012, p. 451).

ヒメネスの主張を表にして以下にまとめる⁷⁾。

(8) 表3 : Jiménez (2011)

さて、なぜ二極文ではなく従属文とするのかという根拠は既に3. 2. でも触れたが、別の理由も見よう (Jiménez, 2011: p. 21)。

(9a) Es muy eficaz aunque trabaja poco.

(9b) Aunque trabaja poco, es muy eficaz.

上記の例で、*aunque* が導く文 (*aunque trabaja poco*) は全体の文の中で移動が可能である。つまり、(9a), (9b) のいずれの順番でも可能であり、いわゆる本質的副詞文と同じである。このことからこの文は二極文ではなく従来の従属文であると考えられる。

表3：Jiménez (2011)

文のタイプ	下位区分	基本的接続詞
等位文 Coordinadas	連結文 Copulativas	<i>y</i>
	離接文 Disyuntivas	<i>o, o...o...</i>
二極文 Bipolares	逆接文 Adversativas	<i>pero, sino</i>
	推断文 Ilativas ⁸⁾	<i>luego, entonces</i>
	結果文 Consecutivas	<i>que</i>
	比較文 Comparativas	<i>que, como</i>
従属文 Subordinadas	原因文 Causales ⁹⁾	<i>porque, ya que, como</i>
	譲歩文 Concesivas	<i>aunque</i>
	条件文 Condicionales	<i>si, como</i>

筆者としては、いわゆる「本質的副詞節」と「非本質的副詞節」の性格に差異がある（状況補語として働くか、あるいは文全体の修飾語として働くか）ことは認めながらもこのことが両者を分離して、前者を従属文、後者を二極文にすることの決定的な理由にはならないと考える。

4. 比較文と結果文：真の二極文か？

ここまではロホ（1978）を出発点にして、二極文とされたものの一部は明らかにそうではないことを実証してきた。ここから先は視点を変えて、筆者なりの二極文を定義していきたい。具体的に言うと、筆者は二極文を「相関文」と再定義し、そのことによって二極文の範囲をさらに絞り込んでいきたい。相関文とは比較文と結果文のことであるので、結果的に二極文のカテゴリーにはこの2つのみが残ることとなる¹⁰⁾。

4. 1. 比較文と結果文の定義

我々は比較文と結果文の定義のカギは「相関関係」(correlación)にあると考える。このことに関して、バスケス・デ・レオンと見解を共にしている。

[...] hay que establecer una distinción en cuanto a la forma de expresar comparación que puede ser por medios léxicos, contraste entre oraciones y por elementos correlativos. Este último procedimiento es el que debe considerarse que constituye propiamente [...] oraciones bipolares comparativas, [...] (Vázquez de León, 1990: p. 804).

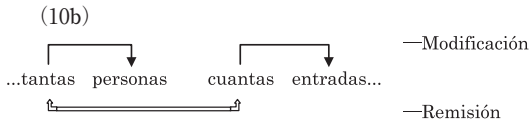
つまり、我々にとっては上記のバスケスが挙げた3つ目の手段、つまり「相関詞」(correlativo)によるものこそが比較構文である。

それでは次に「相関関係」(correlación)とは何かを問わねばならない。それは2つの言語要素がお互いに要求する（交互に remisión を行う）統語関係のことである。これらの2つ要素とは、いわゆる「比較詞」(comparativo) と呼ばれるものである。例を挙げると、不等比較の *más...que* の *más* を「第一比較詞」、*que* を「第二比較詞」と呼ぶ¹¹⁾。

以下の例を見られたい (H. Martínez, 1987: pp. 311-312) :

(10a) Admiten *tantas* personas *cuantas* entradas haya.

ここで *tantas* は *personas* を修飾 (modificación) し、*cuantas* は *entradas* を修飾している。その上、*tantas* と *cuantas* 間には何らかの統語的關係がある。この統語關係を remisión と呼びたい (適当な訳がないので仮に「照応」としておく)。つまり、*tantas* と *cuantas* は同時に2つの統語的力を発しているのである。図示すると、



修飾においては片方の要素が核 (núcleo) であるとするともう一方は修飾部 (modificador) である。しかし, remision においては片方がもう一方を修飾するのではなく, 2つの要素がお互いに「照応」(remision) し合っている。ここには「主-従」の関係はなく, 両者ともに必要な要素である。H. マルティネスによれば,

Está claro, por tanto, que aquí *tanto* y *cuanto* son elementos 'correlativos', esto es, mutuamente necesarios para expresar lo que podríamos llamar <comparación cuantitativa>. No se puede hablar entonces de núcleo y adyacente, pues no hay subordinación, sino más bien solidaridad entre ambos "cuantificadores" (H. Martínez, 1987: p. 312).

上記のようにマルティネスの言う *tanto* ~ *cuanto* 間の連帯 (solidaridad)こそ, 「相互依存」という関係に他ならないと考える。

4. 2. 比較文と結果文のプロトタイプの構造

全ての比較構文を生成する潜在的なプロトタイプの構造として次のようなものを想定することができる。

- (11) Seg.A: ± Suj_a ± V_a ± OD_a ± OI_a ± CC_a
 ± Atr_a... + 1.^{er} comparativo
 Seg.B: ± Suj_b ± V_b ± OD_b ± OI_b ± CC_b
 ± Atr_b ... + 2.^o comparativo

「第一比較詞」(primer comparativo) は *más*, *menos*, *tan*, *tanto*, *tal*, *así*, *el mismo*, *otro* 等を指し, 一方の「第二比較詞」(segundo comparativo) は *que*, *como*, *cuanto*, *cual* を指している。第一比較詞

はA部の中で何らかの統語的機能(主語, 目的語など)を果たしている。B部においては比較された要素を除いて両部に共通する要素は全て省略される。例えば,

- (12a) Juan escribe cartas a sus amigos más frecuentemente que María.

は以下のように分析できる。

- (12b) Seg.A: Juan escribe cartas
 Suj_a V_a OD_a
a sus amigos más frecuentemente
 OI_a CC_a
 Seg.B: que María (escribe) (cartas)
 Suj_b V_b OD_b
(a sus amigos) (frecuentemente)
 OI_b CC_b

A部とB部で共通の要素は, 両者間で比較される要素1つ(María)を除いてB部では全て省略される。このようなタイプの構文を「単焦点比較構文」(Comparativa Unifocal)と呼んでいる。おそらく最も頻繁に見られる形式であろう。

また一方で, 2つあるいは2つ以上の要素が省略されずにB部に残った構文もある。このタイプの例を以下に見てみよう。

- (13a) Pedro regala más claveles a su novia en primavera que rosas envía Luis a su madre en verano.

- (13b) Seg.A: Pedro regala más claveles
 Suj_a V_a OD_a
a su novia en primavera
 OI_a CC_a
 Seg.B: que Luis envía rosas
 Suj_b V_b OD_b
a su madre en verano
 OI_b CC_b

この例では比較される要素は5組で, 後半部でも全てが省略されずに残っている。この構文を「複焦

点比較構文」(Comparativa Plurifocal) と呼ぶ。

(12) のタイプも (13) のタイプも見かけはかなり異なるが、その潜在的構造としては全く同じものである。それが (11) のプロトタイプの比較構文である。

(13) のような後半部に省略がない比較構文を見た後では、結果構文も実は同じ構造であることに気づくであろう。

(14a) Juan es tan alto que llega al techo.

(14b) Seg.A: $\frac{\text{Juan}}{\text{Suja}} \text{ es } \frac{\text{tan alto}}{\text{V}_a} \frac{\text{Atra}}{\text{Atra}}$
 Seg.B: $\text{que } \frac{\text{llega}}{\text{V}_b} \frac{\text{al techo}}{\text{CC}_b}$

もちろんここには全く並行関係がない。結果構文の B 部に省略される要素もなく、B 部の構造は A 部の構造と関係なく全くの自由である。つまり、比較構文は「対称構造」(Estructura Simétrica) であり、結果構文は「非対称構造」(Estructura Asimétrica)

をなしている。しかし、いずれも同じ構文の 2 つのバリエーションであると考えられる¹²⁾。

5. 新たな複文の分類の提案

比較文と結果文を我々独自の方法で定義したので、次に新しい分類の提案に移りたい。二極文を第 3 の区分として用いる他の研究者とは違い、我々はより狭い意味でこれを捉えた。つまり、二極文は相関文に限るわけである。その他の以前は二極文とみなされていたもの(逆接文、非本質的副詞文等)は結局除外されることになる。

5.1. 新たな分類

(15) 表 4 : Nakai (2014)

逆接文と非本質的副詞文を二極文に入れないことは既に論じたので繰り返さない。我々の分類の特徴の 1 つは、推断文 (Ilativa) を等位文とみなしている

表 4 : Nakai (2014)

文のタイプ	下位区分		代表的接続詞
等位文 (結合文) Coordinadas (Conectivas)	多重等位 Coord. Múltiple	連結文 Copulativas	<i>y, ni</i>
		離接文 Disyuntivas ¹³⁾	<i>o</i>
	単純等位 Coord. Simple	逆接文 Adversativas	<i>pero, sino</i>
		推断文 Ilativas	<i>luego, entonces, pues</i>
二極文 (相関文) Bipolares (Correlativas)	比較文 Comparativas		<i>más...que, menos...que, tan(to)...como, tal...como, así...como</i> <i>el mismo...que, otro...que</i>
	結果文 Consecutivas		<i>tan(to)...que, tal...que, así...que</i>
従属文 (填込文) Subordinadas ¹⁴⁾ (Incrustadas)	本質的副詞文 Adv. Propias	時況文 Temporal	<i>cuando</i>
		場所文 Locativas	<i>donde</i>
		様態文 Modales	<i>como</i>
	非本質的副詞文 Adv. Impropias	原因文 Causales	<i>porque, ya que, como</i>
		目的文 Finales ¹⁵⁾	<i>para que</i>
		譲歩文 Concesivas	<i>aunque</i>
	条件文 Condicionales	<i>si, como</i>	

ることである。この種の文については研究者間に合意がないといってよい (NGLE, 31.1e)。そもそも独立したタイプとしていない分類も多い。NGLE (2009) は次のようにも言っている。“Entienden algunos autores que las oraciones ilativas se deben agrupar con las coordinadas” (46.11g)。推断文は連結文や離接文と似た特徴を持つ。以下の例を見られたい。

(16a) Ya es tarde, pero acabaré de explicar este tema.

(16b) *Pero acabaré de explicar este tema, ya es tarde.

(17a) Pienso, luego existo.

(17b) *Luego existo, pienso.

上記のように、前半部と後半部を入れ替えることができない点は同じである。

また、ロホやヒメネスは等位文の条件として2つ以上の要素を結ぶことができることを挙げているが、我々の立場はこの条件を用いないことは既に述べた。2つ以上の要素を導入できるかどうかは後に、等位文の低位区分を立てるにあたり用いたい。つまり、等位文の下に (i) 2つまたは2つ以上の要素を導入できる、(ii) 2つの要素のみを導入する、とさらに2つに区分し、前者 (Coordinada Múltiple) に連結文と離接文、後者 (Coordinada Simple) に逆接文と推断文を所属させる立場である。

5. 2. それぞれの複文の構造

最後にそれぞれの文の構造を図示して考察してみたい。まずは並置文である。

(18) 並置文 Yuxtapuesta

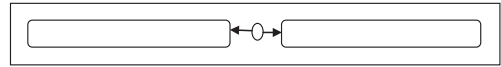


N. B. □ は複文全体, □ は複文を構成する各文を表す。

これは2つの独立した文がそれらを接続する要素なしでさらに上位の1つの文を構成している場合である。2つの意味的な関係は文脈に依存する。

そしてこのようなほぼ独立した2文の間に接続詞がある場合は、等位文となる。

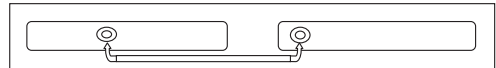
(19) 等位文 Coordinada (結合文 Conectiva)



この等位文を「結合文」(Conectiva) と呼び、ほぼ独立する2文を繋ぐ働きを「結合」(conexión) と呼んでいる。図中では矢印で示されているように等位文を繋ぐ等位接続詞はいわば「二方向」にその統語力を発揮していると考ええる。そして、この接続詞は前後のいずれにも文にも属さず、いわば「外部」にある存在である。

続いて二極文 (相関文) の構造を図示する。

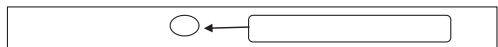
(20) 二極文 Bipolar (相関文 Correlativa)



この構文では、2つの構成部を繋ぐ手段はそれぞれの「内部」にある比較詞 (◎で示す) であり、これらがお互いに相関という相互依存関係にある (⇔で象徴している)。

最後に従属文を図示する。

(21) 従属文 Subordinada (挿入文 Incrustada)



この構文は全体の文の中に従属文がはめ込まれた構造となっている。はめ込まれた文は全体の文の構成要素のいずれか (動詞や目的語等)、または複文のその他の部分全体に対して修飾という統語作用を及ぼしている。

上記のように新しい分類による3つのタイプの構造はそれぞれ十分に特徴的なものであり、当分類の妥当性を示していると考えられる。

6. おわりに

伝統的な二分法(等位文/従属文)とそれらに二極文を加えた三分法(等位文/二極文/従属文)が現在のスペイン語学界の主流であるが、筆者は二極文の概念をさらに絞込み、同時に相関文という概念を再定義してこれこそを二極文であるとした。相関文はさらに比較文と結果文に下位区分されるが、これらは同一の潜在的構造の現れであるとした。

今回の分類提案はあくまで大枠を示したものであって、詳細に関しては別の機会に譲りたい。例えば、あまり研究が進んでいない推断文(*Ilativa*)の位置づけや、ともに従属文に分類した本質的副詞文と非本質的副詞文の扱い等が今後の課題となる。

注

- 1) 本来は「名詞節の複文」とすべきであろうが、本稿では「名詞文」とした。これは「主節+従属節」全体を表すためである。以下、「形容詞文」「状況補語文」等についても同様。
- 2) *Nueva gramática de la lengua española* (NGLE, 2009) 参照。ただしその下位区分の立て方に関しては異なる点がある。例えば、従属文として「推断文」(*Ilativa*)や「除外文」(*Exceptiva*)が入れられている。
- 3) ロホの分類では単文もここに入るが本稿の目的外なので省略した。
- 4) ロホは「*Distributiva*」に言及しているが、その例は挙げていない(p. 108)。
- 5) ロホは「*Consecutiva*」に言及しているが、その例は挙げていない(p. 104)。また、比較文(*Comparativa*)にも全く言及がない。しかし、この研究書では全てのタイプを挙げたわけではないと明言しているので、実際には比較文も二極文として想定していたのかも知れない。実際、Rojo y Jiménez (1989) ではそうになっている。
- 6) Cfr. Rojo (1978): p. 109; Gutiérrez (1978/1997): pp. 29-30 (本論では1997年のものを引用する); Fukushima (1982): pp. 99-101; etc.
- 7) ヒメネスは他に「*Correctiva*」(*y también, pero no, etc.*)も二極文としているが、今回は表から省いた。あまり研究者によって扱われることはなく、別途検討すべきだと考えるからである。
- 8) 「*Ilativa*」については後に考察する(5. 1.)。
- 9) ヒメネスは *pues* と *puesto que* を従属接続詞とせずに二極文の枠組みで扱っている。しかし、これらは原因文の特殊な形態であり、別途検討が必要であると考え今回は表から省いた。
- 10) “solo con él (el concepto de bipolaridad sintáctica) podemos explicar la estructura de comparativas o consecutivas, en las que el comportamiento de sus conectores no responde a pautas subordinantes” (Jiménez, 2012: p. 451).
- 11) 比較構文の構成要素については Nakai (1997) 参照。
- 12) 比較文と結果文の密接な関係を指摘する研究者は多い。例えば、“Hay, pues, un evidente parentesco (histórico, formal y semántico) entre las consecutivas de intensidad y las comparativas de igualdad” (Narbona, 1990: p. 78).
- 13) 我々は配分文を離接文の一種と考える。非連続配分文(*bien... bien..., ya... ya..., etc.*)は、“expresan más bien alternancia que distribución” (NGLE, 31.3p).
- 14) この図では従属文のうち“*Sustantiva*”と“*Adjetivas*”は省いている。
- 15) 現在でも「目的文」(*Final*)に関して研究者間で意見一致がないと言ってよいだろう。以前のように名詞節の一種と考える者もあれば、「原因」(*Causal*)と同じで従属文だとする者もいる。筆者は後者の立場である。

Bibliografía

- Alarcos, E. (1994): *Gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe.
- (1970): “Español /que/”, *Estudios de gramática funcional del español*, Madrid, Gredos, pp. 260-

- 274.
- Fukushima, N. (1982): "Shohyo: 'Cláusulas y oraciones' Guillermo Rojo (1978)", *Tenri daigaku gakuho*, 133, pp. 93-106.
- García Berrio, A. (1870): *Bosquejo para una descripción de la frase compuesta en español*, Univ. de Murcia, pp. 209-231.
- Gutiérrez Ordóñez, S. (1978): "A propósito de 'Cláusulas y oraciones'", *Actas del IV Coloquio Internacional de Lingüística Funcional*, Univ. de Oviedo, pp. 259-270; reeditado en *La oración y sus funciones*, Madrid, Arco/Libros, 1997, pp. 23-39.
- (1994a): *Estructuras Comparativas*, Madrid, Arco/Libros.
- (1994b): *Estructuras Pseudocomparativas*, Madrid, Arco/Libros.
- Jiménez Juliá, T. (1995): *La coordinación en español. Aspectos teóricos y descriptivos*, Anexo 39 de *Verba*, Univ. de Santiago de Compostela.
- (2011): "Conjunciones y subordinación en español". *Verba*, 38, pp. 7-50.
- (2012): "Notas sobre la sintaxis funcional analítica en España", *Cum Corde et in Nova Grammatica. Estudios ofrecidos a Guillermo Rojo*, Univ. de Santiago de Compostela, pp. 443-455.
- López García, Ángel (1999): "Relaciones paratáticas e hipotáticas", *Gramática descriptiva de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe, 1999, pp. 3507-3548.
- Martínez, José A. (1994): *La oración compuesta y compleja*, Madrid, Arco/Libros.
- Martínez García, H. (1987): "La relativa relatividad de /cuanto/", *In memoriam Inmaculada Corrales*, I, Univ. de La Laguna, pp. 309-318.
- Nakai, K. (1997): "Reflexión en torno a los componentes de la Comparativa del español", *Academic Bulletin*, 48, Univ. de Estudios Extranjeros de Kioto, pp. 61-67.
- Narbona, A. (1979): "Sobre Cláusulas y oraciones de G. Rojo", *Studia Philologica Salmanticensia*, 3, pp. 305-311, reeditado en *Sintaxis española: nuevos y viejos enfoques*, Barcelona, Ariel, 1989, pp. 117-124.
- (1983): "Sobre las oraciones *biplares*", *Alfinge*, 1, pp.121-139, reeditado en *Sintaxis española: nuevos y viejos enfoques*, Barcelona, Ariel, 1989, pp. 125-136.
- (1989): *Las subordinadas adverbiales improprias en español*, Málaga, Ágora.
- (1990): *Las subordinadas adverbiales improprias en español (II)*, Málaga, Ágora.
- Real Academia Española (1973): *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe.
- Real Academia Española y la Asociación de Academias de la Lengua Española (2009): *Nueva gramática de la lengua española*, Espasa Libros, Madrid.
- Rojo, Guillermo (1978): *Cláusulas y oraciones*, Anexo 14 de *Verba*, Univ. de Santiago de Compostela.
- (1983): *Aspectos básicos de sintaxis funcional*, Málaga, Ágora.
- Rojo, Guillermo y T. Jiménez Juliá (1989): *Fundamentos del análisis sintáctico funcional*, Lalia, 2, Univ. de Santiago de Compostela.
- Sáez, Luis Ángel (1999): "Los cuantificadores: Las construcciones comparativas y superlativas", *Gramática descriptiva de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe, 1999, pp. 1129-1188.
- Vázquez de León, A. M. (1990): "Algunas observaciones sobre la denominación y clasificación de las oraciones comparativas", *Actas del Congreso de la Sociedad Española de Lingüística: XX Aniversario*, II, Madrid, Gredos, pp. 797-804.

Nota

Esbozo de una nueva clasificación de las oraciones compuestas : A través de la redefinición del concepto de las oraciones “Bipolares”

NAKAI Kuniyoshiⁱ

Resumen : En la larga historia de la gramática del español se ha mantenido la tradicional dicotomía “Coordinadas” / “Subordinadas” como clasificación de las oraciones compuestas. Pero, sin embargo, por la publicación de *Cláusulas y oraciones* (1978) de Guillermo Rojo se introdujo una tercera categoría denominada “Bipolares”. Sus ideas, en general, fueron recibidas por muchos estudiosos con buena aceptación, pero tampoco faltaron objeciones y críticas sobre algunos puntos importantes de su teoría. Limitándonos a los tipos de las oraciones Bipolares por él establecidas, las “Adversativas” y las “Adverbiales (Circunstanciales) Impropias” no deben incluirse entre las Bipolares.

Tras la revisión crítica de las “Bipolares” las redefinimos como “Correlativas”, que son dos oraciones conectadas por medio de dos términos comparativos (por ej. *tanto...como*). La relación sintáctica que existe entre los dos comparativos la llamamos “correlación”, en la que los dos elementos se exigen mutuamente y ninguno de ellos es el núcleo ni el modificador.

Las Correlativas se dividen, a su vez, entre las “Comparativas” y las “Consecutivas”, que podemos considerar como dos formas derivadas de una misma estructura prototípica latente. Las Comparativas presentan normalmente una “Estructura Simétrica” mientras que las Consecutivas una “Estructura Asimétrica”.

Por último, trataremos de establecer, a nuestra manera, una nueva clasificación tripartita de las oraciones compuestas del español: “Coordinadas” / “Bipolares” / “Subordinadas” o en nuestra propia terminología “Conectivas” / “Correlativas” / “Incrustadas”. En nuestra clasificación las Coordinadas se dividen entre las “Coordinadas Múltiples” y “Coordinadas Simples” y a las primeras pertenecen las “Copulativas” y las “Disyuntivas” y a estas últimas las “Adversativas” y las “Ilativas”.

Palabras clave : oración compuesta, Coordinada, Subordinada, Correlativa, Comparativa, Consecutiva

i Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University